

令和4年6月28日

南の風特集号女子日本代表ワールドカップに向けてIV

～ 恩塚ヘッドの目指すバスケットボール、就任からトルコ戦まで ～

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

Ⅲの続きです。

3 スイッチディフェンスの克服

東京五輪決勝でアメリカが見せた、スイッチングマンツーマンディフェンスは女子日本代表にとって脅威となりました。私が映像で観た印象について書きます。

アメリカのスイッチディフェンスの目的は、林選手と宮澤選手の3P シュートを徹底して守ることと、町田選手からの合わせのパスを如何に封じるかにあったと思います。結果として、3P シュートの確率は林選手が、0/1、宮澤選手が0/2に封じられました。日本の3P シュートのトータルは、**8/31で確率25.8%**でした。最多本数は、本橋選手の4/5（確率80%）で以下、高田、三好、エブリン選手の1/4、ひまわり選手の1/3という結果でした。

一方アシスト数は、町田選手の6が最高で、本橋選手の4、高田選手の2になっています。町田選手は準決勝のフランス戦では、**オリンピック史上最多の18アシストを記録**しましたが、決勝ではアメリカに1/3（6アシスト）に抑え込まれました。

決勝の映像を観ると、アメリカの日本対策の全貌が見えます。

<その①>

トランジション時に、コミュニケーションによるマッチアップ（それぞれが近くの選手に付く）が徹底されていました。スー・バード選手（PG）やダイアナ・トーラシ選手（SG）が素早く指示していました。原則のマッチアップは決まっていたようですが、非常にフレキシブルにスイッチして、マッチアップを変えていました。

これによって、日本はトランジションからの速攻やセカンドブレイクを阻止されました。アメリカのハリーバックが非常に速く、あるときはボール運びの町田選手にスー・バード選手が付き、またあるときはセンターのブリトニー・グライナー選手が、「ピタッ」と付きました。ピックアップが早いので、日本の攻撃展開はかなり苦しいものになり、ショットクロックも削られてしまいました。

<その②>

また、日本のスクリーンプレーに対しても徹底したスイッチやスイッチアップでの対応が目立ちました。トップの位置での日本のスクリーンにも、センターのグライナー選手は積極的にスイッチしてポイントガードの町田選手にマッチアップしていました。町田選手のパスは絶妙なのですが、グライナー選手のサイズと手の長さはかなり気になったようでした。3P シューターの林選手や宮澤選手に対しても、アメリカのスイッチディフェンスが功を奏しました。日本がスクリーンから、林選手や宮澤選手をノーマークにするように試みますが、巧みなスイッチから、エイジャ・ウイルソン選手やブリアナ・スチュワート選手がタイトについて、3P シュートを打たせませんでした。

このようなスイッチマンツーマンディフェンスによって、日本のオフェンスはかなり制限されたものになり、準備した戦術が機能しませんでした。次号に続きます。